

会議名	平成 17 年度第 1 回「食を考える国民フォーラム」
開催日時	平成 17 年 10 月 21 日（水）13：00～16：00
開催場所	有楽町朝日ホール（東京都千代田区有楽町 2 - 5 - 1）
主催者	食を考える国民会議
参加人数(概数)	約 600 名（出席者名簿公開なし）。栄養や食の教育・行政・指導者が多かったようだ。
1. 会議の概要	<p><b>メインテーマ;「あなたの食事は乱れていませんか - 外食や中食を上手に取り入れた『食事バランス』のすすめ」</b></p> <p>食を考える国民会議は平成 11 年発足。会員 1 千を超える財団法人である。「食生活指針」が策定され、「食育基本法」が制定され、内閣府の下、文部科学省、厚生労働省、農林水産省の連携により、今年度に「食事バランスガイド」が作成され普及・定着に取り組んでいる。今回のフォーラムでは、基調講演とパルデスカッションを通じて、栄養、外食・流通等を通じて国民の食生活に「食事バランスガイド」をどのように取り入れるかを考えた（理事長開会挨拶、農林大臣祝辞より）。（添付資料参照）</p> <p>これに出席し、畜産の側から見て消費者が畜産物についてどのように指向し、各界の指導的立場の識者がどのように誘導しようとしているのかについての情報を収集した。</p> <p>（第 1 部）基調講演  「あなたの食事は乱れていませんか - 外食や中食を上手に取り入れた『食事バランス』のすすめ - 」</p> <p>講演者；服部 幸慶（服部学園 理事長・校長。食育について十数年来の提唱者。内閣府食育推進会議委員）</p> <p>交通事故、自殺を除いた日本人の死因の主要部分を生活慣習病が占め、これを減らせば更なる健康・長寿社会が実現する。食育は 3～8 歳で格を作り、8～18 歳で補正し、20 歳で完成させなければならない。演者の経験から、18 歳を過ぎた学生では頭で理解できても実践はできない。食育は家庭・学校・地域で横断的に繰返し行うことが大切。このガイドの活用をお願いしたい。</p> <p>（第 2 部）パネルディスカッション  テーマ「食事バランスガイド*」をどう生活に取り入れていくか</p> <p>*；あなたの食事は大丈夫？ 一人暮らしの皆さんへ  太り気味の男性の皆さんへ  子育て世代の皆さんへ</p>

(添付した3分冊を参照)

コーディネーター；中村靖彦(東京農大客員教授)

パネリスト；生田 智子(女優)

清水 信次(日本スーパーマーケット協会会長)

竹見 ゆかり(女子栄養大教授)

服部 幸慶(服部学園 理事長・校長)

横川 きわむ(日本フードサービス協会会長)

冒頭にビデオ「日本型食生活」(4分)上映。

論点としてコーディネーターが示した「このパネルディスカッションのテーマ実現のために、もっとも重要と思われること」、「食事バランスガイド」についてのご意見」、「これを普及できるか」等についてのパネリストの発言の要点を以下に記す。

(生田) 離乳期の乳児、サッカープロ選手の夫を持つ主婦として、食の重要性を痛切に感じている。自からよく食べることが最も基本的に重要。「食事バランスガイド」は説明を聞いて理解できた。プロ選手は体重・体脂肪率が契約条項に入っている。運動量の多いスポーツ選手は別のガイドラインが必要。マスメディアからの発信を期待。

(武見) 食生態学の立場から。生活の中の食を大事にすることの中のバランス。

「食事バランスガイド」作成WGメンバーとして；厚労省摂取基準を基に、諸外国のフードガイドを参考に、3様態・年齢別に摂取の目安を示した。量的表現(絵で)逆ピラミット型に独白色。運動量、水分、菓子・嗜好飲料を加味した。知ってもらうことが大切。スーパー・外食業界の協力を期待。商品開発の参考に。

(清水) スーパー経営。業界代表。成人病患者の立場から食生活の重要性を痛感している。食事と死が直結していることのPRが大切。日本のスーパー業界のレベルは欧米よりも高く、店・会社で食育PR。日本民族存亡の危機。子どもの体力低下は教育の問題。寿命の男女差も考える。

(横川) ジョナサン創業、すかいらーく経営。ファミレス、中食の重要性を強調。食生活がなぜ乱れたのか・どうすればよいのかを考えるべき。外食は主婦代行業。朝食の重要性、家庭料理の見直しが必要。サプリメントに頼りきり、安全性も問題。社長の考え 商品開発者が鍵。バナナが取り入れられてない、自給率向上のためでは困る、3省バラバラの縦割り行政ではダメ。外食はマーケット(消費者)に近くメーカー(農家)に要求しやすい。

	<p>(服部) 食欲の出る病院食の開発に取り組んでいる。  〔まとめ 中村〕;自由であるべき食について国が国民に強制することになるのではないかと、との疑問もある。勝手に「太く短く生きる」人は論外としても、「正しい情報の提供」の立場で普及に努めるべきである。</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表	<p>前項に記したようなこのシンポジウムでパネリストから開陳された食育に関するご意見の少なからぬものに、直接的あるいは間接的に畜産の生産現場に結びつける必要のあるものがあり、その意味で畜産技術研究開発の背景事情として重要と思われる。</p>
3. その他の発表課題で関心のあったもの	<p>フロア参集の方々には、従来の畜産関連講演会やセミナー等とは異なる教育、栄養や食の指導的立場の人と思われる方が多く見受けられた。畜産からの情報発信先として、従来の生産者や消費者から、このようは中間に位置する者に広げる必要を感じた。</p>
4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	<p>食育基本法が制定され、国産農畜産振興のための消費拡大を目的に、より積極的な農業・畜産分野の参画が期待されている。畜産物消費者を標的とした、小・中学校のふれあい教育も含む食育関連をテーマとした課題で、NPO などによるものを誘導し、採択することが考えられる。</p>
5. 報告者	<p>針生程吉</p>